特

塚憲政



極右政権は暴走を始め状況は流動化する 安倍改憲の核を砕く「言論ブロック」 の形成へ

武藤 羊

帝国継承原理への一元化の冒険

96 条 の 定する した。 それが推進する国家改造の企て全体が、 つある。 は状況のダイナミックな流動を呼び起こしつ 走開始の合図であった。安倍政権のこの決定 打ち切り、 気に舞い上がった安倍政権は「安全運転」を れてきた。だが、4月に入って、マスコミ人 をつなぐいわゆる「安全運転」で進むと見ら 選までバブル誘導による経済回復期待で人気 の廃棄の企てを派手に表に出さず、7月参院 は、 権の自壊につけこんで生まれた安倍極右政権 人びとの眼前に浮き彫りになり、 状況は動き始めたと感じられる。 しばらくは改憲による「戦後レジーム 「新憲法」制定への道筋として、 参院選の目玉に、「日本国憲法 「改正」を立てて戦うという決定が暴 安倍政権の個々の政策だけではなく アクセルを踏み込んで暴走を開始 民主党政 疑問に付 を否

> され、 つつあると見える。 賛否両論に晒される局 面が生み出され

係を平然とぶち壊した。 開き直った。 巡る発言を批判する決議を採択した。それ による靖国神社参拝や安倍晋三首相の侵略を 然ながら、 という奇妙なレトリックを弄して、 倍自身も「供物」を捧げた。23日には議員 副総理を含む閣僚の靖国参拝で切られた。 対して安倍は「どんな脅しにも屈しない 会った。韓国は予定の外相訪日をキャンセ 否定してみせた。これらの挑発的行為は、 の過去の反省を盛った「村山談話」を事実上 弁では安倍は「侵略」には学術的定義がない トレーションとして行なわれ、 168名の靖国集団参拝が華々しいデモンス 政権の暴走の口火は、 韓国国会は4月29日、麻生太郎副総理ら 韓国、 安倍政権はこうして両国との 中国からの強い抗議に出 4 月 źi 日 同日の国会答 から始まる 日本帝国 ن ع 当 ル

> 靖国、 支配、 も並び立たないものであった。 さずに保持してきた。 のであったが、戦後国家はそれに加えて戦前 世界支配=覇権原理を内部に組み込んだ国家 働いていた。同時に、 である。 てきたのはこの原理が放棄されなかったから て解決されず、隣国との真の関係構築を妨げ いて「村山談話」のような声明を出しても 承原理」を一貫して、 日本帝国の振舞いを正当化し讃える「帝国 であった。この二つの原理は並び立たないも 性格などが示すように、 あるから、その平和主義と主権在民の原理は 日本国憲法に基づいて組織されている国家で た、と私はかねてから指摘してきた。 の正統化原理を内部に組みこんで成立して 国家」という体制 ほぼ半世紀にわたって存続した 教科書問題、 米軍の事実上の指揮下にある自衛隊 この原理は他の二つの原理のどれと は、 慰安婦などの問題が決し 戦争や植民地主義に しかしふだんは表に出 安保条約、 相互に排除しあう三 戦後日本は、 沖縄の米国 「戦後日 米国 日本は

理には手をつけず、 えることを使命として出現した。 を排除してである。 安倍政権はこの原理を公然と国 平和主義・主権在民原理 米国覇権原 の基礎に据

だったとする帝国継承原理が米国の覇権原理 を排撃し、 孤立だけでなく、柱とたのむアメリカとも摩 擦を生みだすからである。「アメリカ製憲法 しかしそれは容易ではない。 大東亜戦争はアジア解 アジアからの 放の聖戦



歴史認識を真っ向から批判した。 斉に対日警戒の論説を掲げ、 に深い危惧と不信を呼び起こし、 をめぐる安倍と閣僚たちの発言は米国 ないことは明らかだ。 安倍の国家主義 靖 有力紙は一 国 Þ 村 山 アの た。

、眼差しに会うなかで出発したのである。 安倍極右政権はどちらを見ても怒りと不信

立憲主義・ 主権在民否定への警鐘

た。 状況は動き始めたかに見えると冒 どのようにか。 頭に 書 11

月28日に企画された「主 かしなぜ祝うのか。 かに1952年のこの 地殻に亀裂が入り始めるきっかけだ 講和条約が発効し、 自民党はまともな 権 占領が終わ H 回 られなかっ 説明を与え 復 サンフラ 0 日 が

ンシ

スコ

治

的

約の評 約と安保条 としなかっ 口 た。 は触れよう スコ講和条 ンフランシ 11 いつつ、 が日本国 米国 復 主 この日 を言 |支配 価に # 権

> 下に遺棄された屈 全島挙げての抗議に立ちあがり、 いくつかも、 の出席を拒否した。 かなりきびしい論評を掲げ 辱の日に他 本土の主要メディ ならない 知事 沖縄 は政 府

手に のである。 らの主権の回復のことではなかったのである 民主権を廃止し、 を改定・廃止する自由の「回復」 「主権回復」とは、日本支配集団が 実は、 い回復」 「回復」 自民党の の意味であった。 「占領憲法」 する、それが自民党語での 主権を人民の手から国家の 主権 が規定する国民=人 回 復 はアメリ を意味した 「占領憲法」 Ź 主 か

砲など発することはできなかった。 けた。だが失敗した。政権は左右中道すべて の安倍の挨拶はまったく無内容、 から浮き上がり、 行事を改憲ドライブの理念的出発点に位置づ この文脈で安倍自民党は、 言葉を失った。政府式典で 主 権回復 改憲への号 0 H

明 は変えてはならぬことだとし、 そして必ずしも政権の望むコースに沿ってで 号砲ミスによるフライングのようにである。 は触れずに「変えていいこと、 な主張をかかげ、 が社説で はなくである。 念日にかけて、 しかし現実に憲法問題は、 自民党憲法草案が否定する立憲主義 「96条改憲に反対する」と最も明 憲法記念日の全国紙は 丹念にチェックしたわけでは 走り出した。 「朝日」社説は96条改憲に 5月3日憲法記 安倍側とすれば ならぬこと 応の立場を 一毎日

うとしたと言えるのではないだろうか のメディアは安倍の改憲暴走には距離を な その中で二つの点に注目したい。 明 確な改憲メディアを除くと、 つ

え「裏口入学」という批判の声が挙がった。 改憲を串刺しに自民党改憲案自 にも見え見えだったので、 という自民党の術策が思った効果をあげな 行ったのである。 何より、 のか」という揶揄が飛び、 かったことだ。「選手がルールを書きかえる 96条改定を先行させ、全面改憲への扉を開く 改憲手続き改憲」 自民党の中からさ 批判的議論は96条 の狙いはあ 体に迫 まり つ は 7

批判は、 が、 である。 憲論議の軸として受け入れられたかに見える のものを変えようとしていると指摘するこの 文だけではなく、 命じるものに変えようとしている。 民党権力は逆に国家が人民になすべきことを 在民を否定する― の自民党憲法草案が、 立憲主義_ 人民が権力を縛るためのものであるのに、 そして何より、 一気に焦点化したのである。 全体として立憲主義を否定する 多くの評者から発信され、 はメディアで市民権を得たよう 安倍自民党が国家の性格そ 憲法記念日を境として、 -恐るべき代物であること 個々の条文だけではな 憲法は本来 個々の 今後の改 È Ė そ

国家主権か人民主権かが争われているという クスルーであると私は思う。 これは事態の認識における突破口、 憲法をめぐって

心を衝くための足場となりうるだろう。把握は、極右自民党の「自主憲法」国家の核

――野合でもなく一枚岩でもなく対抗的言論ブロックを

が必要だ。 ためには、その具体的な展開を阻止すること 具体化されつつある。極右国家を挫折させる PPなどをめぐる 政権の 全面的 攻勢を 通じて 発、 けられている。立憲主義の破棄は、 進行しており、 からである。 制度・政策・思想を備えた体系的プロセスだ だろう。極右勢力の国家改造は、それ自身の ら遠ざかり、 どまるなら、 そうだとしても、それが憲法論の次元にと 安保、歴史認識、 プロセスはすでに主要な分野で 人びとの関心から乖離していく 今日の日本社会の現実の問題か 改憲はその総仕上げと位置付 教育、 ジェンダー、 沖縄、 Т 原

広がりつつある。 の民衆の活動は活発化し、 の対抗力を形成している。 りつつあるし、 配 ていることである。 大する多様な運動、 セスに対して、 この拒否の運動は、 重要なのは、 原発を拒否する動きは下から これらすべての国家改造プロ 下からの民衆の拒否力が、 近代日本国家の根本に迫 活動として存在し発展し 沖縄の基地撤去・日本支 多様となり、 総体として下から 横に 拡

らの政治表現を奪われているからである。自運動、そして極右に危機感を抱く人びとが自とはいえ状況は深刻だ。これらの下からの

ろう。 らの力が、 産党、 が失われてからもう20年近くになり、 民党vx社会党という議会政治における きい影響を与えるだろう。 的結集をはかる努力も行なわれている。それ TPPなどの課題で政治家に働き掛け、 権との対峙線をつくることが緊急の課題であ け幅広い政治勢力が共同の声を挙げ、 衆運動は形成しえていない。間近に迫った7 に介入する横断的な連合、政治ブロックを民 ものを視野の中心に捉え、その立場から政治 現した。人民主権剥奪をめざす国家再編その たことが判明し、 抗軸であった自民・民主の対抗は、ガセであ 始まりに過ぎない。 すことができるか。それはその後の展開に大 の流動化を引き起こし、安倍の改憲攻勢を乱 月参院選では、 v社会党という議会政治における対抗 選挙戦には包括的な課題をかかげて共 社民党、 限られた時間の中で最大限の情勢 96条改憲に反対するできるだ 市民政党も登場する。 維新のようなキワモノも出 だが7月参院選は 安倍政 脱原発 横断

て安倍トンデモ政権のトンデモ国家改造のプ て安倍トンデモ政権のトンデモ国家改造のプ にの小論でそれを主題的に論じるのは無理で るか、というところに問題はしぼられてくる。 この小論でそれを主題的に論じるのは無理で あるが、私は、政治ブロックの形成に並行し あるが、私は、政治ブロックの形成に並行し あるが、私は、政治でものが形成され で、あるいはそれに先だって、対抗的言論圏、 を必要を提起したい。すなわち、支配的言論

を形成する必要である。一枚岩ではなく複合的で活発な社会的言論圏人びとの考えと噛み合い、相互作用しつつ、に対して、それを掘り崩し、その意図を暴き、

闘、会議や相互訪問、ネット上でのコミュニ 野合でもなく一枚岩でもない政治ブロックの 翼国家の言論ブロックに非対称に対抗する、 ら、そのなかでいくつかの山と広いすそ野の そうな部分を重ね合わせ、 領域との重なりがある。意識的にこの重 史はそれぞれの運動に固有のものである。 を追求する社会運動であろう。 その形成の推進者は、 徳的、文化的、論理的優位性をもつのが民衆 に近い。ただ「二分」されるだけでなく、 プとしうるかどうか われる7月参院選をその形成のためのステッ 形成とほぼ同義であるだろう。それなしで闘 ある合意圏の光景が現れるだろう。それは右 のままにしながら、重なりを増やしていくな 拠や焦点目標の周囲には広がりがあり、 かし相互に孤立したものではない。運動の根 を意識的に重ね合わせて行く。 ケーションなど、多様な形で、 の言論ブロックであるような国論二分である。 これはかつて「国論二分」と言わ 今日それぞれのテー 重ならぬ部分はそ 人の交流や共 獲得目標、 お互いの言論 n た状 主なり 道 マ

(むとう・ハちよう/ピープルズ・プラン研究所運むのは他日を期すほかない。紙数が尽きた。この乱暴な素描から先に進

営委員、5月5日記)(むとう・いちよう/ピープルズ・プラン研究所運